

シリーズ・江戸アラカルト

平成 22 年 11 月 1 日投稿

会員投稿：木村 勝紀

第 2 回：古着屋とエコライフ

江戸時代はエコ社会でした。とくに着物は貴重品でしたから、庶民は何度でも洗い張りをし、仕立て直して大切に着ました。

自分が着られなくなると、小さく作り直して子供に着せたり、子供が着古したとなると、古着屋へ売りに出しました。着物として用をなさないほどになると、雑巾にしたり、下駄の鼻緒にしたりしました。庶民の暮らしの中に、リサイクルのエコ生活が定着していたのです。それに比べれば、今日のわれわれの消費生活は、なんと贅沢で無駄の多い社会でしょうか。いつかしっぺ返しのお灸をすえられはしないかと心配です。

大名や上級武士、裕福な商人たちは絹を着ていましたが、長屋に住むような庶民は麻布が当たり前だったのです。木綿の着物が庶民にまで広く普及したのは、江戸も中期から後期に入ってからのことでした。しかも、新品の着物は高価でしたから、庶民はもっぱら古着屋を利用したのです。

古着屋に集まる衣類は、暮らしに困り果て、やむなく売り払ったものや、時には死者の着衣も混ざっていたといいます。死者が身に着けていた着物さえも、有効に再利用しようとしたのでした。死者の着物を買取る「湯灌場買い」【ゆかんばがい】という専門業者がいたそうです。

江戸では柳原土手（現在の神田川沿い）や富沢町（現日本橋富沢町）などに多くの古着屋が軒を並べ、大勢の人で賑わったといいます。古着屋の元祖は、鳶沢甚内【とびざわじんない】という盗賊でした。江戸の初期、鳶沢甚内は江戸市中を荒らしまわっていましたが、ついに御用となりました。しかし、盗賊の逮捕に協力するということを条件に、処刑を免れました。

やがて鳶沢甚内は、「盗賊を逮捕するばかりでは根絶やしにはできない。むしろ、彼らを何とか食えるようにしてやったほうがよいのではないか」と、幕府を説得しました。鳶沢甚内は、幕府から元吉原近くの土地を払い下げてもらい、まず配下の者たちを集めて、古着屋を出させました。ですから当初、この地は鳶沢町と名づけられましたが、後になって富沢町に改称されたのです。

その後、急速に古着屋が増えたことから、幕府は許可制にしました。一年に金一両（およそ現在の十万円）を徴収して鑑札を交付して、鑑札のない者は営業禁止としたのでした。

現在の世の中でもリサイクルショップやフリーマーケットで古着を買うことができますが、そのルーツは江戸にあったのでした。

【江戸川柳】 探訪江戸川柳より
柳原合羽と化ける正一位

ふんどしが訥子に化ける柳原

正一位稻荷大明神の幟を改造した合羽もあれば、ふんどしや腰巻を仕立て直した宗十郎頭巾も並んでいた。

(注) 訥子【とっし】とは？

歌舞伎役者初代沢村宗十郎の俳号です。

訥子に化けるとは？

沢村宗十郎が初めて用いたといわれる宗十郎頭巾に仕立て直して売っている。

【写真】宗十郎頭巾



以上 文責：木村勝紀